報告②　律令国家の辺要政策と肥後国・鞠智城

報告者紹介

吉村　武彦（よしむら　たけひこ）

東京大学文学部国史学科卒業、同大学院人文科学研究科博士課程中退。

東京大学助手、千葉大学専任講師・助教授・教授を経て、明治大学文学部教授を歴任。現在、明治大学名誉教授。博士（文学）

主な著書には『日本古代の政事と社会』『大化の改新を考える』『蘇我氏の古代』等多数。

専門は日本古代史

律令国家の辺要政策と肥後国・鞠智城

明治大学名誉教授　吉村　武彦

一　はじめに

「辺要」という言葉は昨年度のこの会でも使わせていただいたのですが、まだ比較的馴染みがない言葉と思います。古代史をやっていないと分かりづらいということを言われるかと思いますが、資料編一ページに辺要とは何か、というのを辞書的にも書いていますので、そちらを見ていただければいいかと思います。実は辺要とは何かというのを書いたときに改めて思ったのですが、「大和中心史観」、中央から見ますと、やっぱり辺境とか、フロンティアとか辺要というのですけれども、この「辺」というのはあくまで中央から見た「辺」です。境界という意味で、今は境界論、ボーダーが重要なのですけれども、実際は熊本から歴史を発信する、あるいは地域から歴史をみようとした時に、中央が前提になって、辺境でいいのかどうか。辺という概念を使うとすれば、せめて要という〝かなめ〟、つまり、中央からみても周辺にある辺境にあるけれども、それは要（かなめ）の位置を持っている。せめてこういうことで、やっぱり熊本とか肥後の国とか、鞠智城を考えるということが必要ではなかろうかと思います。日本列島というのは北の方に蝦夷、それから南に

図１　古代東アジア図（唐代）

は隼人、そして、これは八世紀になってからですけど、蕃国ということで新羅ということになります（図１）。六世紀の筑紫の「磐井の反乱」以前においては、やはりこの肥後国地域も、ある種の独立性を持っている。こんな「辺」の字を使っていいかどうかということは、改めて考える必要があるのではないかと思いますけれども、『日本書紀』『古事記』とか、その後の『続日本紀』等は、やはり大和中心史観ですから、あまりそういう言葉がないことも事実なのです。改めてこのパワーポイントを作っている時に、東京で話すのだったらいいかもしれませんけど、熊本で話すのに辺境とかいうより、まだ「辺要」の方がいいのではなかろうかと、そういう感じを持っ

ております。それからこの間考えていますが、大化の改新詔とか、これは孝徳朝、孝徳天皇の時期でありますけれども、同時に、東国に対して、大化改新詔以外に「国司の詔」というのが出される。これは比較的日本書紀に史料が残っているのでわかりやすいのですけれども、後は全国に対しても諸国に使者を派遣している。東国と諸国をどう考えるのか、そういうこともありますけれども、当然西海道にもきています。そして一体何をしたか、ということの関心が今私自身非常に高くなってきています。それから昨年ぐらいから、福岡県の小嶋篤さんが七世紀後半の製鉄工房は東北地方とこの北部九州では、同じだっていうのです。

古事記においては西の熊襲タケルの征討が終わった後、アヅマ、つまり蝦夷の征討、東のほうに行くわけです。熊襲タケルの征討後に、出雲タケルの征討ということがありますが、いろいろ考えていくと、そういう伝承の中でも蝦夷と隼人というのが対になって出てくるではないか。一方的に蝦夷だけではなくて、西に対する征討も行われているのではというように思ったのです。それは、大化改新において、諸国に使者が派遣された時に主な仕事としては武器の収公とか兵庫の修営、それから戸口調査、人口調査ですね。それと土地利用のあり方、この三つが諸国への使者派遣の任務としてありまして、東国にはもう少し細かく書かれているのですけど、そして大化の改新詔が出される。だいたい「東国国司の詔」と諸国に派遣された使者の任務から改新詔の構造は大体わかってきたのですが、そういうことを考えると、実は『日本書紀』というのが興味深い。越の渟足柵（ぬたりのさく）と磐舟柵（いわふねのさく）が孝徳紀に出てきます。これは日本海側です。太平洋側については史料がないのですが、仙台市の郡山遺跡の第Ⅰ期がどうも孝徳朝以降らしく、

やはり蝦夷対策という意図をもっている。そうすると現在の『日本書紀』は、壬申の乱以前はちょっと史料がなくなったという言い方もしますけれども、むしろ『日本書紀』は必ずしもすべてのことを網羅していない。もし九州に対して何らかの行動があっても史料がない。史料がないから非常に難しいので、ここは考古学の方の研究成果に依拠せざるを得ないのですが、そう思っている時に小嶋さんの説に接したということになりました。そうすると、やはり辺境政策としては共通するものがあるかもしれない。ただし、違いもかなりありまして、東の方に対しては多賀柵とか最初は「柵」という字を使うのですけれども、九州のほうでは、大野城とか基肄城とかって「城」の字を使っています。だからここも鞠智城というわけです。もちろん違いはかなりあるのですが、この際違いを無視し

図2　奈良時代東アジア図

て、むしろ共通性をちょっと考えてみたら、どうなるかというような問題意識を持って考えてみたということになります。先ほどのレジュメに詳しくは書いてありますが、律令制国家の辺要なのですが、辺要というのは「居レ辺為レ要」（「辺において要となす」）というような定義づけがされていました。特にこの図は渤海、朝鮮半島では新羅ですけど、それで、その夷狄（いてき）の蝦夷、この地図（**図2**）には実は隼人が書いてない。なぜ書いてないか、最近出た『古代日本対外交流史事典』という本から使わしてもらっているのですけれども、これは書いてないのですが、まあそういう認識が多いのかなというように思います。やはりこの夷狄は、東国の蝦夷と九州南部の隼人と私は考えておりますので、辺要政策をもうちょっと考える必要があるのではないかと、今回九州ということでちょっと振り返ってみました。

二　三～五世紀の九州島

（1）『魏志』倭人伝における筑紫

いわゆる魏志倭人伝です。中国と言っても楽浪郡（らくろうぐん）から来るわけですが、「郡使の往来、常に駐まる所」となって伊都国に来るわけですが、もうこの時期から。楽浪郡から倭国に来る時にこの「津」において、どういう文書、あるいは賜物があるかを調査する。卑弥呼になると思いますが、まちがいを起こさせないことが書かれているわけです。

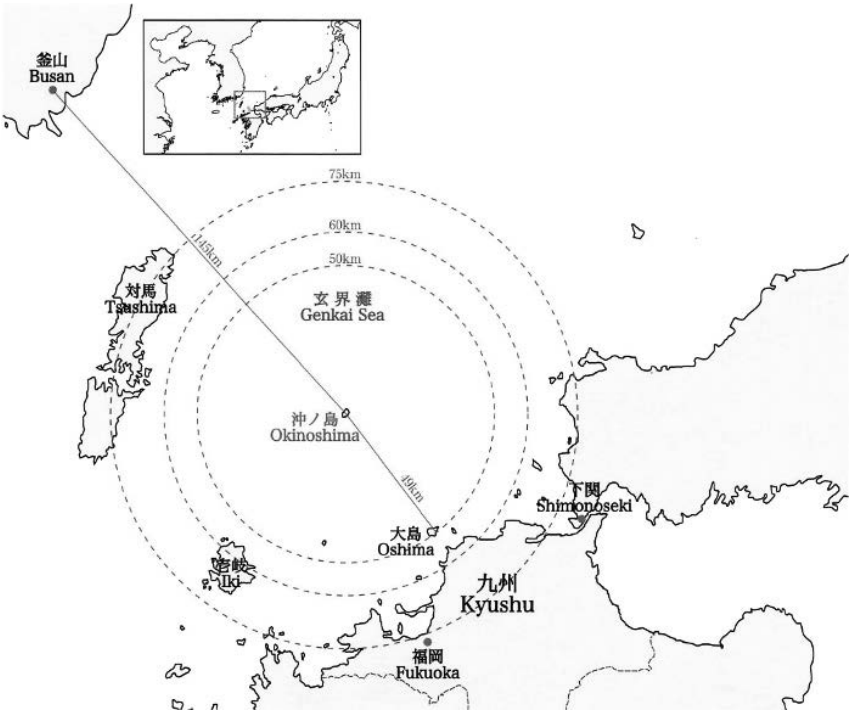


図3　沖ノ島位置図

（2）ヤマト王権による沖ノ島祭祀の起源

四世紀になりますと中葉ぐらいから、世界遺産になりました沖ノ島は、図3の地点にありまして、だいたい九州から対馬、プサンとの関係からいっても、沖ノ島祭祀というのは、海上交通の問題から非常に重視されてきているということになります。九州というのは、そういう位置にあるということは、ご存知かと思います。

（3）五世紀における列島支配

五世紀に入りますと、和水町に有名な江田船山古墳の銀錯銘大刀（写真1）というのがあるわけですが、これとは別に同時代史料として宋書倭国伝に、武の上

表文というのが書かれています。かつてこれだけで、どういう中国の古典籍の影響を受けたかという研究もありましたが、現在は全唐文とか中国の古典籍のデータベースがありますから、それで調べていけばかなりわかるわけです。そこでは「東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海の北、これは朝鮮半島のこと、を平ぐること九十五国」というのが出てきます。これは近畿地方を中心にして考えて、東は毛人、西は衆夷ということで、これは九州が入っても当然おかしくはないわけかと思うのです。それと同時に熊本の和水町から銀錯銘大刀が出土していて、そこからワカタケルとわかるということなのですが、東の方では、昔の武蔵の国でありますけども、現在の行田市稲荷山古墳から金錯銘大刀が出ています。やはりこれに対応するような形で、東と西と、私はどうも偶然ではないのではないかというように思うのです。ただ、他に出てくるかもしれません。

別の問題なのですが日本書紀では、大泊瀬幼武（おおはつせのわかたける）は八世紀半ばに決まった中国風諡号の天皇の名前では雄略天皇というようになっています。皆さん見られたことがあると思いますが、ここには「典曹人」という語があります。私自身は、曹を司る人というように考えています。これは漢語で

写真１
江田船山古墳
銀錯銘大刀

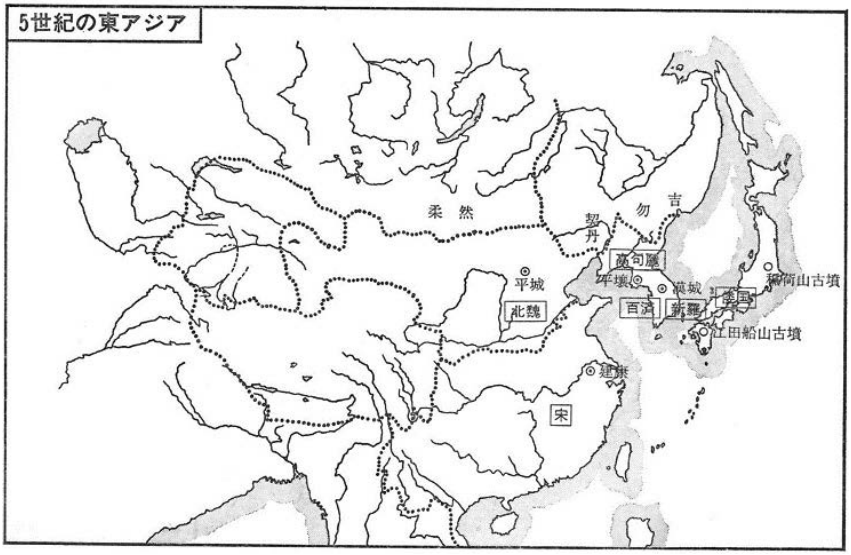


図４　５世紀の東アジア地図

表現されている形になります。東のほうは稲荷山古墳の金錯銘大刀「杖刀人」、当初は刀を杖つく人と呼んでいましたが、これは最近の中国文を検索すればわかるのですけど、杖というのは持つという意味があるのです。だから刀を持つ人という意味だと私は思いますが、このように典曹人とか杖刀人とかという語です。最近では朝鮮半島の北の方、しかも中国の北朝系にある人制と関係あるのじゃないかという田中史生さんの考えもあります。五世紀の人制の職能集団と考えていますが、少なくともこの肥後国地域から都に出て「典曹人」というような扱いを受けた人が出てきているということです。五世紀後半になりますと、この地域もヤマト王権との関係が非常に強くなってきているということは間違いないだろうと思うのです。

それと、もう一つは、先ほどもちょっと言いましたように、ヤマトタケル伝承でありまして、これはクマ

ソタケル征討で帰路にイヅモタケル。ただ、帰路にどういう道を通ったかというのは、ちょっとわかりづらいのですが、そのあとアヅマへの征夷というのが行われるわけです。もともとの名は日本童男（やまとおぐな）というのがヤマトタケルなのです。それがクマソタケルを征討することによって、クマソタケルからタケルという名称をもらって、ヤマトタケルになる。これは成人式による名前の変更という考え方ももちろんあって、私もそれでいいかなと思うのです。少なくともヤマトタケルという伝承と、それからワカタケルという実名が出て来たものですから、この伝承もむしろ大化前代に遡っていいと思っています。かなり古い伝承を持つのではと思っています。さっき言いました毛人五五国と衆夷六六国ということをどのように考えているかということになります。五世紀に古東海道がどうなっているのかというと、ヤマトタケル伝承のルートの、三浦半島のところに長柄桜山古墳群という中に一号墳、

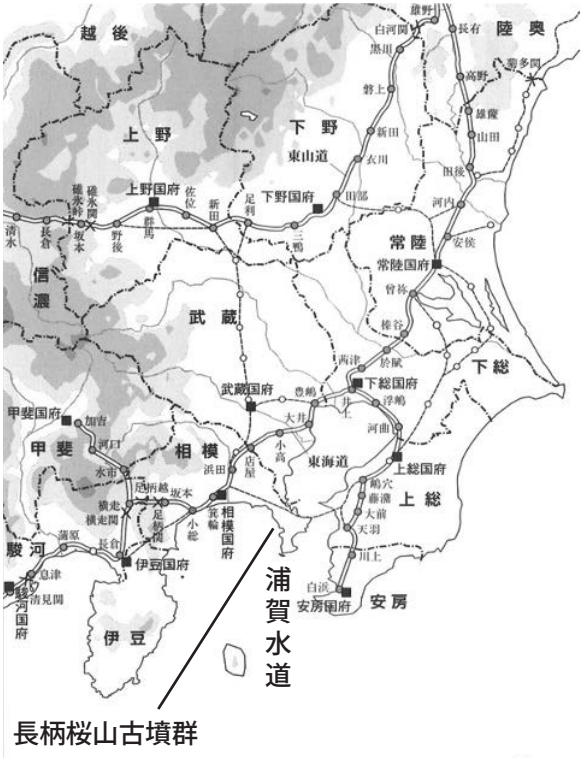


図５　律令期東国国府・官道地図

二号墳というのがあります。たまたま携帯電話の基地局みたいのを山の上に造ろうとした時に見つかったのが、この長柄桜山古墳になりますが、これは前期古墳になります。ヤマトタケル伝承によれば、浦賀水道、東京湾をわたって上総国に行きます（**図5**）。上総・下総の上とか下というのは、都に近い方が上で（上総）、遠い方が下になります（下総）。相模から古い東海道は、このヤマトタケル伝承にほぼ合いますが、その場所に前期古墳が出てきたということになりますので、このルートはかなり古くてもおかしくないのではなかろうかということです。ヤマトタケル伝承の発想は東西になっています。ところが、日本書紀の崇神天皇紀の四道将軍というのは、北陸・東海、それから西の道と丹波という、四つの道になっていますが、私は後世的に作られたもので、当初は東の道、もちろん海の道と山の道があり、東海道、東山道になります。それから西の道で、山陰道の場合はどこまでできているかどうかです。山陰道沿いに高地性集落がありますので、ある程度古い道があることは間違いないだろうと思います。ただ、この崇神紀の四道将軍の話は後世的ではと思っています。

三　六～七世紀前半の九州島

（1）糟屋の屯倉―継体紀の筑紫―

六世紀になりまして、いわゆる筑紫君磐井の反乱が起こりますが、ここでは「西の戎（ひな）の地を有つ」とあり戎という扱いを受けています。筑紫君磐井はヤマト王権に負けた後、子孫が糟屋屯倉（かすや

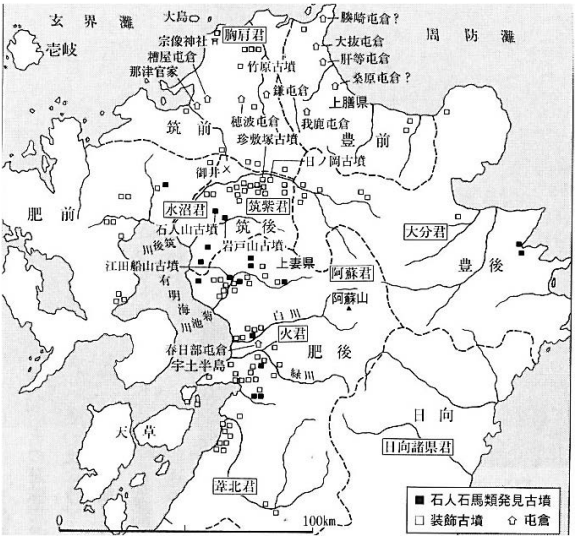


図６　古墳時代屯倉・豪族分布地図

のみやけ）（図６）を献上するということになります。現在、糟屋屯倉の遺構は分かっておりませんが、屯倉の後に糟屋評というのができます。それが阿恵遺跡で、ほぼ間違いないだろうと考えられます。郡の前身が評なんですけれども、七世紀後半の評衙跡がもう出てきていますので、おそらくその周辺に糟屋屯倉の建物跡が出てくるはずです。現在のところ分かっておりませんが、出てくれば、六世紀ぐらいからの有り様がもう少し分かるようになるかもしれないと思っています。

（２）那津の屯倉―宣化紀の筑紫―

その後、那津の官家（みやけ）を造るわけですが、筑紫の国は「去來の関門

＊　各地ミヤケから稲穀の集積

主管者	運搬担当者	穀を支出する屯倉
宣化天皇	阿蘇仍君	河内国茨田郡　屯倉の穀
蘇我大臣稲目	尾張連	尾張国　屯倉の穀
物部大連麁鹿火	新家連	河内国志紀郡　新家屯倉の穀
阿倍臣（大夫）	伊賀臣	伊賀国屯倉の穀

表１　各地ミヤケから稲穀の集積

に拠する」所、つまり、「門」はミカドとか色々読み方がありますけど、この関門というのは現在も「なんとかの関門」になるという、かなり重要な位置であるという意味づけされています。それともう一つは、この那津官家を造るときに、各地域からいろいろ穀を集めるわけです（**表1**）。その時に主管者、これが全て豪族であれば、全体を天皇は統括しているということになるのですが、これを見る限り宣化天皇は、これも何故阿蘇仍君かよくわかりませんが、河内国茨田郡の屯倉の穀を運ばしています。その他は、当時の大臣とか大連とか阿倍臣が運んでいるわけです。つまり、全体のイニシアティブを握っていたにしても、具体的な主管者となっているのが天皇とは限りません。ということは、やはり各地域、あるいは豪族がそれなりの独自性を持っているということを意味する可能性があるということです。だから、まだ六世紀前半はそういう時期にもあたっていたのではなかろうかと思っています。

（3）崇峻天皇の暗殺と筑紫

推古朝の直前の崇峻二年には、蝦夷対策が取られます。東山道に使者を遣わし蝦夷の国の境を視察。この時にも東海道とか北陸道に使者が派遣されています。その三年後に崇峻天皇暗殺。崇峻天皇が暗殺されるのは「内の乱れ」になります。「内の乱に依りて、外の事をな怠りそ」ということで、外交関係の事をきっちり怠りなさんなということが出てきています。日本書紀の注釈書を見ますと、前年に派遣された任那派遣の将軍がまだ滞在しているというような解釈をしているのですが、それで果たして良いかどうかです。これはまだ充分、考えていないのですが、筑紫大宰以前に筑紫将軍というような者がいたのか、いないのかが問題

です。一年前に派遣された将軍がいてもおかしくないのですが、あえてそれを筑紫将軍と呼ぶのは、この筑紫に何かがあった可能性があります。つまり、筑紫大宰との関係があるのではなかろうかと、現在思っています。ただ、これから研究をしなければならないかと思います。

（4）推古朝の筑紫大宰

そして筑紫大宰の初見記事が推古一七年条ですけども、これは倭国に使いが来たのじゃないのです。朝鮮半島の百済の使いが嵐によって流れてきて、それが葦北の津に来たということを筑紫大宰が中央に使者を派遣している。筑紫大宰というのがいつ頃できたかということもありますが、筑紫大宰は推古朝にはいたことになります。葦北の津は**図7**に書かれています。日本書紀を読む限りは、この百済の関係者は船にいた可能性が強いとは思いますが、何らかの施設があったかどうかということも考えなくてはなりません。今のところ別に考古学的に施設があるかどうか、あるとすれば、この津の周辺に何があるかということではないかと思うのです。筑紫大宰の初見記事の時に、

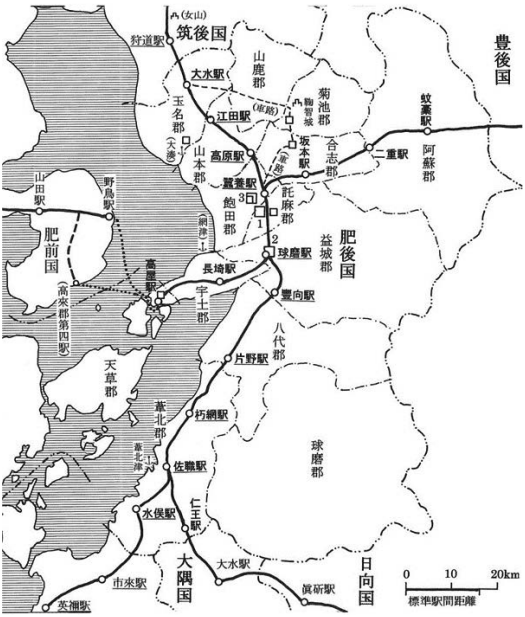


図7　肥後国官道地図

葦北の津が出てきているのは肥後と筑紫大宰との関係を示唆しているのではないかと、考えられます。

四　大化改新と夷狄・蕃国政策

（1）使者の派遣と蕃国・夷狄政策

それから　日本書紀・孝徳紀の大化の改新です。大化改新詔の研究と「東国国司の詔」の研究は、ずいぶんやられているのですが、諸国に対する使者派遣についてはあんまりされていないということが、最近ようやくわかってきました。私の恩師にあたる井上光貞さんもあまり書いてないのですが、それはともかくとして、ここに武器の収公と兵庫の修営というのがあるのです。「東国国司の詔」には、蝦夷対策が出てきますが、もし北陸への使いが東国「国司」に入らないとしても、北陸地方にも諸国に対する使者が派遣されています。そこに「蝦夷親附」というのが出てきますから、対蝦夷政策があったことになります。全国へ派遣された使者が九州に来ているとすれば、いったい武器の管理とか兵庫建設とか、戸口の調査もあるのですが、何らかの隼人政策があってもおかしくはないのです。ですから、これは今後考えていかなければならないと思います。どうも改新時における諸国に派遣された使者の武器収公策と夷狄との関係は、どうなっているのかということも、今後の研究の視野に入れて考えなければならないと思います。

（2）孝徳朝における夷狄政策

先ほど言いましたように、大化三年の渟足柵、大化四年の磐舟柵でありますけれども、太平洋側につい

ては仙台市の郡山遺跡の第Ⅰ期の官衙遺跡がどうも孝徳朝の時期ということで、夷狄政策はあったようです（図8）。九州島に関しましては、実は史料はありません。記述はないわけですが、郡山遺跡の実例から言うと、史料がないからといって隼人政策はなかったということも言えないのです。今後の課題として、夷狄政策の施設が出来ていたか、出来ていないかということを念頭において考えなければならないのではなかろうかと思っています。

図8　7世紀後半のヤマト王権東国平定地図

五　七世紀後半の辺要政策

（1）白村江の敗戦による防衛体制

それから具体的に鞠智城ができるのは、白村江の敗戦と関係があります。百済救援の時には、斉明天皇は

筑紫まで出行しています。こんな時期には行幸はないという説もかつてあったようですが、もともとワカタケルという倭国王も動いております。天皇が動かなくなるのは、むしろ飛鳥・奈良時代的な発想ではなかろうか。奈良時代的な発想で天皇が動いても、私はそれほどおかしくないと思いますが、唐・新羅連合軍に大敗するということになるわけです。そこで、西日本の山城と同時に九州北部に山城ができるということになりまして、これは白村江との直接的な関係のもとにできる古代山城、日本書紀やその他の歴史書にのっている山城を朝鮮式山城といって、記載されてないのを神籠石系山城と言っています。そういう山城にあたるというわけです（図10）。その後、かつては筑紫大宰はもっと海岸沿いだったと思いますが、それが内陸部に移ってきます。大宰府から直線距離六二キロの場所に鞠智城ができます。近年では阿志岐城も発見されました。また土塁の遺構も出てきておりますので、私は大宰府の周りを全体的に囲んでいたとい

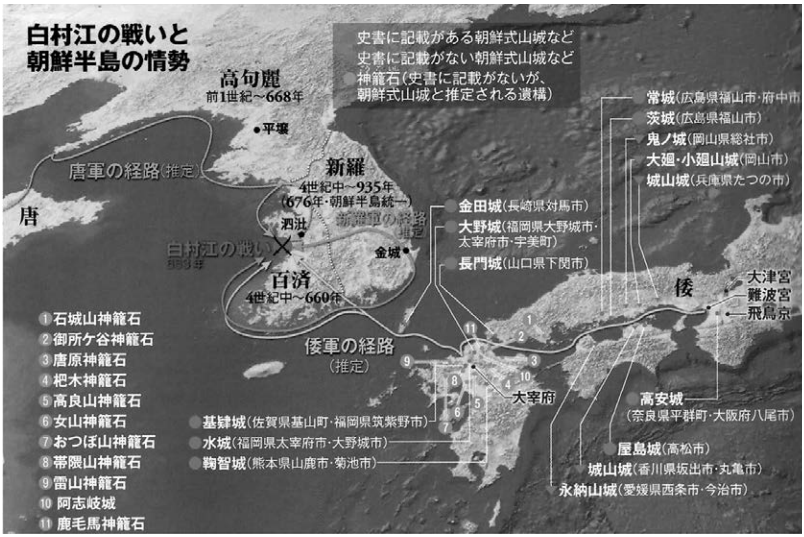


図９　白村江の戦いと朝鮮半島の情勢（P16 右図）

図 10　古代山城の分布

うように想定しています（図11・12）。

そういうことで、七世紀後半の辺要政策を考えていく時に、白村江の敗戦後の防衛体制の記事を引用しておきました。全部説明することはできませんが、そのうちの②は、まずは二城で大野城と基肄城ということです。筑紫の国と書かれたときに、のちの筑後と筑前を合わせた筑紫と、それから九州全体を指す場合もあります。というのは長門城は後の令制国の長門の国です。そうすると、この筑紫城二つというのは、長門との関係で言うと、筑前・筑後において二つを築くということになるので、肥後は入らないということになります。壬申の乱のときにも、これはもう少し広い概念の筑紫の国かと思いますが、「辺賊の難を戍る」と出てきているわけでありまして。「城を峻（たか）くし隍（みぞ）を深くする。海に臨みて

『新版 古代の日本』3

図 11　九州古代史地図（律令時代）

守らするは」、これは大宰府を中心かと思います。そしてそのあと、「大宰府に大野・基肄・鞠智の三城を繕治せしむ」ということがありますから、これはもう大宰府の指示、指令によって三城と関係してきます（**史料1**）。ですから、九州を考える場合は、大宰府、国府、それから鞠智城と考えるのか、大宰府と直結した鞠智城で考えるのかの二通りの考え方があります。「大宰府に三城を繕治せしむ」と書いてありますから、これは大宰府が責任を持ってやるということになると思うわけです。

六　八世紀初頭の辺要政策

八世紀初頭になりますと、大宝律令が発布されます。職員令大国条に返要の語が出

◇ 白村江敗戦による防御体制 － 九州島

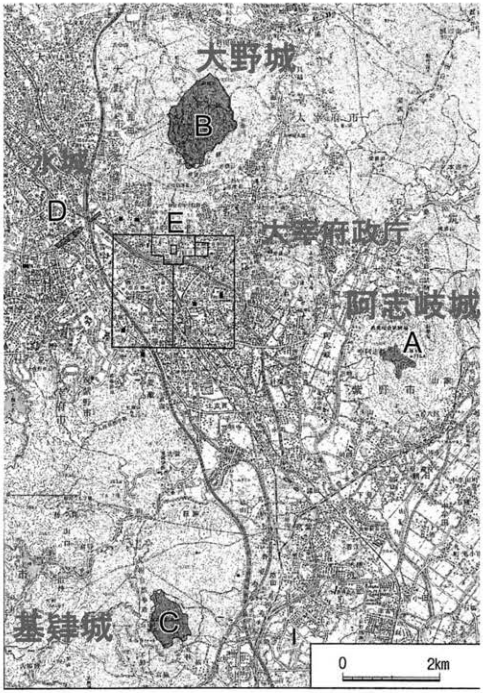
②達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣して、大野及び椽(基肄)、二城を築かしむ

⑤長門城一つ・筑紫城二つを築く

⑥ 壬申の乱「筑紫国は、元より辺賊の難を戍る。其れ城を峻(たか)くし隍(みぞ)を深くして、海に臨みて守らするは、豈内賊(あた)の為ならむや」

⑧大宰府に大野・基肄・鞠智の三城を繕治せしむ

（史料１　白村江敗戦による防御体制記事（『日本書紀』『続日本紀』）



第３図　阿志岐城跡位置図
Ａ阿志岐城跡　Ｂ大野城　Ｃ基肄城　Ｄ水城　Ｅ大宰府政庁

草場啓一「阿志岐城跡」

図 12　大宰府と周辺古代山城・城

てきますが、これは直接的には陸奥と越後、北の蝦夷対策と（図13）、それから西のほうで壱岐・対馬・日向という、これは当然のこととして隼人も意識されているわけです。養老令になりますと、そのあと建国した薩摩と大隅が入ってくるわけです。軍防令に関して言えば、東辺条に書かれた条文では、西辺いうことになります。当然、東辺・北辺の対蝦夷政策と同時に、西辺の対隼人政策がとられたはずです。こ

の後、永山さんが言われると思いますけども、私は三野城と稲積城というのは、対隼人政策の城だと思います。考古学の研究者は、最近は文献の人も九州北部で考えるのですが、辺要政策を考察していくと、何らかの対策を打っているはずです。それが一般的に言うと、西日本防衛ラインというものが停止された後も続きます。残念ながら三野城と稲積城はまだ場所もわかっていません。遺構がわかっているわけじゃないから、これからのお楽しみということになると思います。大宝元年になりますと、奈良県にあります河内と大和の国の境界の高安城、そこの廃止が決まります。西日本防衛ラインの変化です。城の名前が不明の神籠石系も結構ありますが、**表2**の赤司さんの図表を利用させていただきますと、大野城、基肄城、鞠智城以外はなくなります。部分的には遺構や遺物が出てきておりますが、大半は八世紀の第1四半期ぐらいで終わってしまいます。その他の城が続くかどうか微妙です。なかにはいったん廃絶（停止）するようにもよみとれますが、私は、大野・基肄・鞠智の三城は共通した要素がある

図13　主な城柵の分布

出土土器からみた古代山城の時期消長表

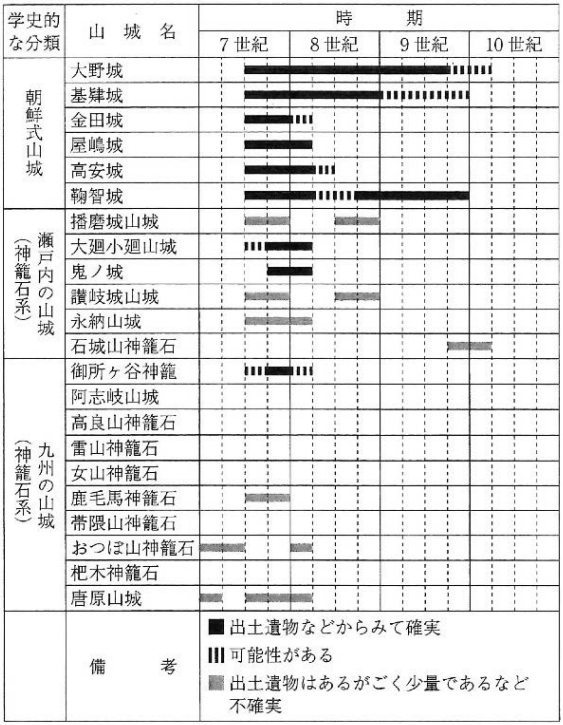


表２　出土土器からみた古代山城の時期消長表

を今後、考古学的に検証する必要があるということになります。白村江の敗戦以降は、西日本防衛ラインというのを造ります。狩野久さんが言われておりますけれども、大宝令によって軍事体制が安定化して、しかも新羅、唐に対する外交が安定化すると防衛ラインは廃止されます。ところが、その後も大宰府の防衛ということで鞠智城は維持されます。これはある意味では、東北の方に対する城柵の政策と共通する要素も出てきます。そういう共通事項を考えてみなくてはならないわけです。

のではなかろうかと考えているわけです。

七世紀後半の状況をまとめますと、筑紫の方は、大化改新の時にどのような政策を具体化したかはよくわかりません。特に文献では史料がないので、考古学側で調査をやってもらわなきゃしょうがないということです。孝徳朝にも「筑紫大宰」が出てきます。どのような施設を造ったかどうかというの

七　肥後国と辺要体制

（1）肥後国と辺要体制

肥後国は、七九五年に大国になります。上国と大国とでどこが違うかというと、国司の官人の数が変わってきます。鞠智城も南方対策がありますが、三野城と、稲積城というのが対隼人政策だと考えています（図14）。ヤマトタケル伝承もそうですが、日向の方からクマソタケルに対する征討活動が行われています。これが日向と肥後との違いということになります。おそらく考古学的にもある程度言えるのではなかろうかと期待しているわけです。肥後国は、もともとは一三郡でしたけれども、八五九年一四郡になります。軍団は四団ありまして、木簡で明らかになっているのは、第三益城軍団というのが明らかになっています（図15）。私は菊池郡にも軍団があっておかしくないと思いますが、それはあくまで想定でありまして、あとはどうなっているのかわからず、わかっているのは第三益城軍団だけです。今後期待したいというふうに思っています。やはり軍団がどこにあるかということも、対隼人のことを考える上で重要かと思っています。

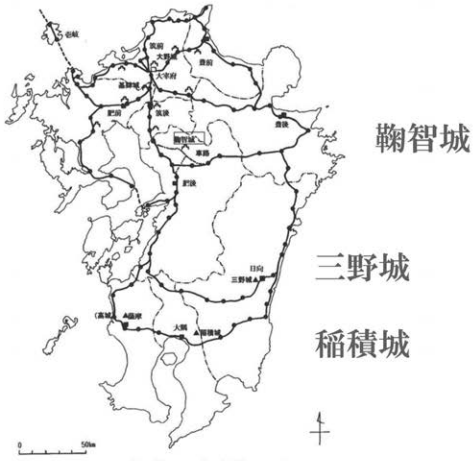


図 14　南九州古代山城推定分布図

九六四・肥後國第三益城軍團養老七年兵士歴名帳
・肥後國第三益城軍團養七年兵士歴名帳（老脱）（軸木口）

郡と軍団
＊13郡
＊859年 14郡

軍団
＊4軍
＊益城軍団

鞠智城

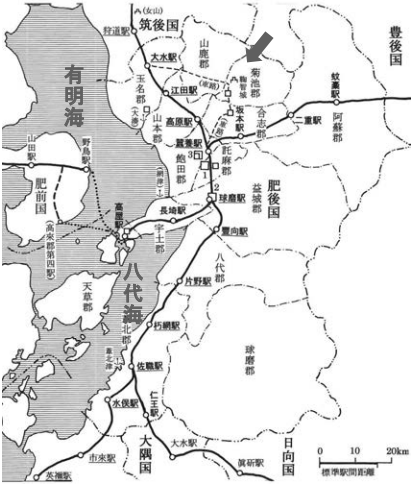


図 15　肥後国　郡・道・駅地図

（2）鞠智城の役割

鞠智城の役割として改めて考えましたが、坂本経尭（つねたか）さんという研究者が指摘したことです。大宰府に対する支援、有明海方面の防御、九州南部の夷狄対策というのがあるわけであります。私もこういう視点から考える必要があるのではなかろうかと思います。

（3）肥前国と有明海

肥前国は風土記が残っていますが、残念ながら肥後の国は残っていません。風土記に肥前の国の烽（ほう）が書いてあります（図16）。その郡別の数を落としてみたら、高来郡は有明海、八代海に面していますけれども、そこに四烽がある。また大村湾岸の郡にも三烽がある。ですから、博多方面と、肥前の北の方の松浦だけではなくて、肥前の南の方にもある。これは当然、有明海を対象にしたことだろうと思います。やはり烽の設置から見ても、肥後の国の問題は南の問題と有明海の問題も考え

ていかなければならないだろうと思っています。

八　むすびにかえて

白村江の敗戦以降は、大野城・基肄城だけが大宰府防衛の一環として最初に造られましたし、それが残るということです。唐・新羅への対策としては、八世紀初頭に対馬・壱岐から高安城までは廃止されたということです。それから、永山さんの話とつながるかと思いますが、本来の辺要政策と隼人への政策変更が影響して、私自身は鞠智城の性格が変わるのではなかろうかと思っています。

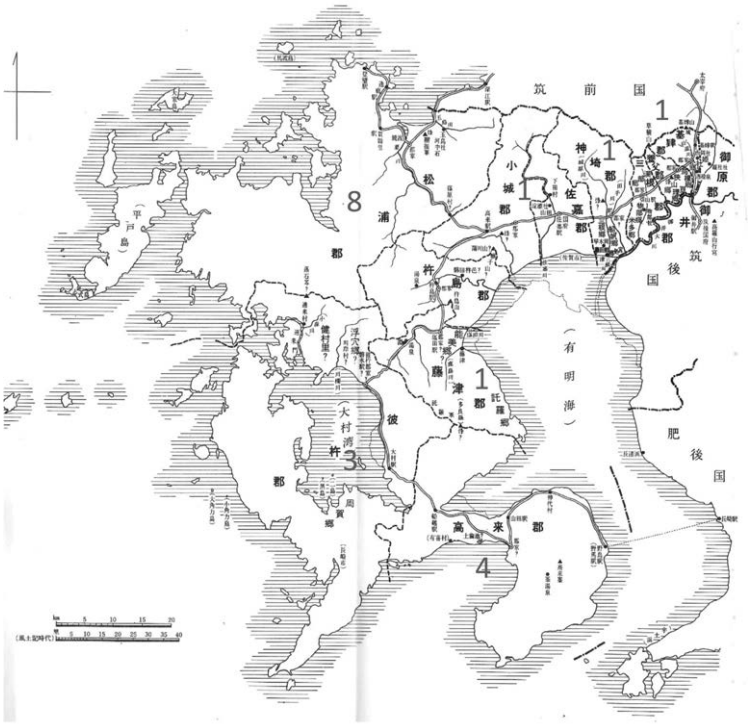


図 16　肥前国の烽（『風土記』郡別）

それからついでに言っておきますが、蕃国・夷狄支配について『記・紀』の神話ではいったいどうなっているかということになります。そもそも天皇は、天の下しらしめすスメラミコトといいまして、蕃国、それから夷狄支配を内包する存在です。天の下をしらしめす、つまり天下を支配しなければ天皇にならないのです。そこで日本書紀では神功皇后紀に皆さんご承知かと思いますが、応神天皇は「胎中天皇」、つまり神功皇后、皇后で天皇ではないのですが、神功のお腹の中にいて、「天神地祇、三韓を授けたまへり」となります。これはかなり重要なことです。それからもう一つ、神話では山幸と海幸の物語で、隼人の服属譚が出てきます。ところが神代紀の一書によりますと、スサノヲは高千穂ではなくて新羅に降臨しています。そういう伝承もあります。これらは、やはり倭国と新羅との関係を示唆しているかと思います。神話にも隼人や新羅の問題が組みこまれています。ご静聴ありがとうございます。